

「キリストさん」

先日、本町 2 丁目の自治会総会がありました。自治会それぞれに規則が異なるのですが、本町 2 丁目の場合、地区内に居住するすべての住民が等しい権利を持っているようで、有岡家からは私が出席したのですが、家族分の委任状が必要だと言われました。「はいはい、わかりました。じゃあ、妻にサインをもらいますね」と言うと、「いえ、家族全員の委任状が必要です」と。結局、妻だけでなく、辰季と那月と律季の委任状も用意することになりました。ちゃんと 2 歳の律季のことまで有権者と認めてくれているのは、有り難い、と言って差し支えない、と思います。ちょっと不思議でしたけどね。ともかく本町 2 丁目は、そういう規則で運営されているようです。総会当日は、教会と駐車場を挟んで西側にある血液センターの、その北に位置している本町会館に集まりました。玄関を抜けると畳敷きの大広間があり、座椅子と座布団が用意されていました。大広間入り口横に受付があって、「はて、どちらさんでしたか」みたいな視線を感じましたので、「敦賀教会から参りました、有岡です」と挨拶をしました。すると、「はあ、あそこのキリストさんね」と。噂には聞いていましたが、教会の牧師が、「キリスト」と呼称されることがあるという。こんなにも罪深いキリストがいて良いものなんだろうか、なんて、ちょっと考えつつ、「あ、はい、キリストの教会のものです」と答えました。

いや、もちろん、「キリストさん」と呼ばれたことに、そんな大層な意味はないことは、わかっています。でも、ちょっと思うところはあるなあ、ということです。私たちにとって「キリスト」とはメシアであり、救世主という意味です。呼びかけた方に、そのつもりはなくても、「はあ、あそこの救世主さんですね」と言われたのだとしたら、ちょっと不思議じゃないですか。敦賀市本町 2 丁目 2-25 という住所に、「救世主」が住んでいるなんて考えたら、ちょっと面白いじゃないですか。でも、それは不思議で面白いと同時に、やっぱり、少し身の引き締まることでもあります。救世主ではないにしても、「キリスト」という名をもって呼ばれる以上、やっぱりそれ相応の態度でありたいと思います。キリスト教を信じてクリスチャンになったとしても、私たちは能力的に何かが開花して、素晴らしい存在に変身できるわけじゃありません。でも、「キリストの御名によって」、

少しだけ何かを変えられた存在であります。その「何か」とは、祈ることを覚えるとか、奉仕の大切さを知るとか、平和を意識して生きるとか、そういう小さな変化に過ぎませんが、その小さな変化を経た者たちが、祈り合い、手を取り合い、「キリストの御名によって」生きることで、この世界が少しずつ平和に近づく、と信じるのが、キリスト教だと言えます。少しの隣人愛、少しの献身さ、少しの奉仕。その少しのことが、主の執り成しによって大きな御業へと変えられるのだ、と。2匹の魚と5つのパンで五千人を満腹させたというイエス様の御業も、それは、「キリストの御名によって」生きる、私たちが各自、その「少し」を持ち寄り、主に委ねることで、思いがけない奇跡が起こり得ることを教えるものでした。

「あそこは、キリストさんだから」と呼ばれる中で、私たちは自分に与えられた主の御名と信仰とを再確認することができます。「神様と私」という親密で閉じられた関係性を越えて、私という存在を通して神様を知り、イエス様を知る人もいるかも知れないことに気づかせてくれます。神様は、私という存在を通して、この敦賀の人たちに関わろうとされているのであり、敦賀の人たちは、私という存在を通して、神様のことを知るのです。特別なことをする必要はありません。しかし、「キリストの御名によって」という自覚を持つことを私たちは求められていると言えるでしょう。それは、ちょっとだけ窮屈で、でも、十分な恩恵と報いを受け取ることでできる、とても尊い生き方であると私は思います。

今日の聖書箇所は、イスラエルの歴史における大きな悲劇であった「バビロン捕囚」の際に活躍した預言者エレミヤの言葉から取りました。このエレミヤさんの言葉は、「苦しみ」を訴える祈りの中に含まれています。預言者エレミヤは、自身に課せられた「預言者」という役割に、非常に苦悩します。今日の聖書箇所の少し前の部分15章10～11節にはこう書かれています。「ああ、わたしは災いだ。わが母よ、どうしてわたしを産んだのか。国中でわたしは争いの絶えぬ男。いさかいの絶えぬ男とされている。わたしはだれの債権者になったことも、だれの債務者になったこともないのに、だれもがわたしを呪う。主よ、わたしは敵対する者のためにも、幸いを願い、彼らに災いや苦しみの襲うとき、あなたに執り成しをしたではありませんか」。エレミヤさんというのは、元来、気の優しい穏やかな人だったのかも知れません。しかも、真面目で人に迷惑をかけることもなく、無難に人生を送る人だったといえます。しかし、主の預言者として立てられたことで、そんな

穏やかな人生は崩壊してしまったということです。「国中でわたしは争いの絶えぬ男」「誰もが私を呪う」。もともと大人しいはずのエレミヤさんにとって、そういう嫌悪を向けられる日々は、非常にストレスだったろうと想像します。「主の御名によって」、エレミヤさんは人生を狂わされたと言っても良いかも知れません。神様を信じること。神様の御心に従うということは、時に、そうした激しい変化をもたらすことがあります。その激しい変化を、真正面から経験したエレミヤさんには、同情すべきところも多々あろうかと思えます。

しかし、このエレミヤさんに見習うべきは、今日の聖書箇所にもあるように「わたしがあなたのために辱めを耐えているのを知ってください」と、神様に向かって言い放ってしまえるところです。神様を信じるが故に味わされる様々な困難や、試練があります。私たちは、そうした苦難や試練に対して、謙虚に、あるいは被虐的に、これらを甘んじて受け入れようと祈ることがあります。もちろん、そういう試練に対して大人しく従順な姿勢も良いのかも知れませんが、たまにはエレミヤさんのように、「あなたのせいで苦しんでいます、忘れないでくださいね」と包み隠さず言うことも、アリなんです。一見して、その態度は、不遜で傲慢にも見えます。しかし、エレミヤさんは、可能な限り主の御心に沿って生きようと志し、母の胎内に命を受けたことを呪いながら、国中の嫌悪を身に受けながら、なお預言者としての生き様を貫こうとしているわけです。それは、どこまでも神様を信じて、愛しているからに他なりません。エレミヤさんも、そして、私たちも信じ愛する神様を相手にして、素直な感情をぶつけてみるのは悪いことではありません。むしろ、偽れぬ悲しみや怒りを心に閉じ込め、神様にさえ黙秘していることによる悪影響の方が心配というものです。

私たちは、多かれ少なかれ、16節の前半部分に書かれたような経験をした者です。「あなたの御言葉が見出された時、私はそれを貪り食べました。あなたの御言葉は、私のものとなり、私の心は喜び踊りました」と。それは、神様にとって、非常に喜ばしい感謝の表現でした。また、一方で、神様の御言葉とは、エレミヤさんにとって、食事と同じくらいに、無くてはならないものである、ということでもあります。私たちにとっても、神様の御言葉は、すでに無くてはならない、生命維持のための恵みであります。神様と私たちを結びつける「御言葉」という強い絆であり、関係性は、私たちの、どんな不満や批判によっても断ち切られることはありません。詩編に歌を寄せた多くの

詩人たちが、自らの思いのままに、神様に悲しみをぶつけたように、怒りを表明したように、私たちも、神様との絆を固く信じるが故に、神様に対して、どこまでも素直に、包み隠さぬ祈りを捧げて参りたいと思います。

「キリストさん」と呼ばれることは、私たちにとって喜びであり、また、重荷でもあります。信仰がなければ、経験する必要のなかった苦労や大変さもたくさんあります。でも、私たちは、ここには、なお良いものがあると信じて、ここには、幸せと恵みがあると信じて、集い、祈り、今日も共に笑顔で挨拶を交わします。地上的な価値観では、値踏みできない天上の宝が、ここにはあります。尽きない希望、現実には負けない信仰心、死してなお仰ぎ見ることのできる幸せな日々、慈しみ合う隣人愛、ありのままを認めてくださる神様の懐の深さ、決して拒絶されない優しさと暖かさ、などなど。挙げればキリがないほどの豊かな恵みがここにはあります。「キリストさんが、集まる場所は、なんかめっちゃええらしいで」という微笑ましい噂が流れるくらいに、私たちは、感謝と喜びと愛を携えて、今日も、この場所から派遣されていきたいと思います。今日から始まる1週間も、まずは私たち自身が幸せを味わい感謝しつつ、その良き香りを広く行き渡らせることができますように。お祈りを致します。

神様。

今日も、私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、心から感謝致します。コロナ禍が落ち着き、私たちは少しずつ3年前の日常を取り戻しています。あなたの家である教会も、全国各地で再び門戸を大きく広げ、多くの人たちを招くため、その営みを再建しつつあります。この社会にあって、私たちがその名に偽りのない「キリストさん」として歩むことができますように。どうか、あなたが私たちに必要な言葉と力とをお与えください。疲れを覚えている人、悲しみの中にある人、無気力に置かれている人のために、私たちがあなたの御言葉を宣べ伝え、あなたの愛を行うことができますように。支え導いてください。そして、そのように主の御名によって歩む私たち一人一人のことを、どうか豊かな祝福で満たしてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げいたします。